

秋季大祭祭文

夫れそ惟おもんみれば日本一の湖沼、琵琶湖の湖南、ここ東方山を含めて満山が紅葉に染まる。日ごと夜ごとに秋は深まり 初冬の準備に入るのか、境内の小鳥のさえずりも静寂の中に琴線をきんせん引くかのよううれに憂うれいをもって聞こえる。

近江の国の古刹、安養寺は千古にわたる悠久ゆうきゆうの寺歴を誇る。全国六十余州に国分寺、国分尼寺と設立、仏教のみ教おしえを広め、写経すずを勧め国家・国民の安穩あんのんを祈願された聖武天皇が、ここを安養ろうべんの地とされ安養寺を発願。同天皇が帰依する良弁僧正ろうべんによって開創される。まさに「天平の營いらか」を並べる。

さらに平安時代初期、承和元年に真言宗宗祖弘法大師が堂宇どううを再建す。ここに弘法大師を中興の祖と仰いで“大師信仰”の発揚はつようの霊場となりうる。

弘法大師のおことばに「法は人によって興おこる」と説かれる。そのように熊谷俊亮住職は安養寺に入山、入寺以来、教化活動きょうけに全身全霊をかけられる。お檀家は全くなき、お寺の維持いじは困難に尽きるなか、ひたすらご本尊に祈り寺域の掃除を怠りなく求道一途ぐどうに精進する。今日三百五十余軒の檀家を戴くなど「思いもよらないこと」

と感謝する。

本日の秋季大祭も継続してきた熊谷住職の浄信の一現である。

いちげん

仏法僧の三宝の建立への強い信力がたぎっている。

さんぼう

しんりよく

さて境内本尊薬師如来を安置する本堂薬師堂の御前に真言密

おんまえ

教の当山派修験道の柴燈護摩供の祭壇が整っている。東方山山中

とうざんは

さいとう

より切り出された檜木の青い葉が整然と組み合わされ間もなく点火される。

ひのき

護摩の火は智火と呼ばれ仏法の智慧を授かる智慧の火 智火であ

ちか

ちえ

さず

る。土中に深く沈んで土の中まで清めてゆく、天と地、大自然に生かされている人間の尊い生命を、また万物を生じて育てる働きを生々化育を得る貴重な儀式のはじまりである。

どちゆう

しょうじょうけい

う

事相と教相、実際の行いと教え、事理一体の妙法にして功德は

じりいったい

みょうぼう

禍いを転じて福とする。「転禍為福」の捷徑すなわち近道なのであ

てんか いふく

しょうけい

る。故に信じる者は無始来の重罪をも滅し、これに帰依する者には

むしらい じゅうざい

きえ

離苦、苦を離れ、得楽、楽しみの利益を蒙るといわれる。さらに

りく

とくらく

りやく こうむ

無病息災の健康で長生きを保ち、福寿圓滿の樂を極める 誠に所

ながい

えんまん

らく

願成就の大法であるといわれる。

仰ぎ願わくば本尊聖者を始め奉り、西部界会の諸尊聖衆、

たてまつ

のうそ
囊租神変大菩薩中興理源大師等、
まつし
末資が無二の丹誠を照覽して
せつけ
梵鐘の法味を納受し、
益々威光を増長して撰化の衆生の勝益を
しょうえき
ほごこ
施し給え。

ふ
伏して乞う。

厄病、
いってんしかい
新型コロナ禍退散、
ふううじゆんじ
一天四海 風雨順時

ごこくぶによう
五穀豊饒
ばんみんけらく
萬民快樂

こと
殊には本日ご参詣の面々
家内安全
息災延命
子孫長久

令和二年十一月十五日

沙門 土口哲光 敬白